

(PDF 版・4の1のイ)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／4 教会の宣教』「二十三節 聞く教会の機能としての教義学—— 教義学の形式的課題」

(文責・豊田忠義)

「二十三節 聞く教会の機能としての教義学—— 教義学の形式的課題」(103-116頁)

「一 教義学の形式的課題」

神のその都度の自由な恵みの神的決断によるところの、客観的な「存在的なく必然性>」——すなわち、その死と復活の出来事としてのイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と主観的な「認識的なく必然性>」——すなわち、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」を前提条件とした（「啓示と信仰の出来事」に基づいた）、主観的な「認識的なくラチオ性>」——すなわち、徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性と客観的な「存在的なくラチオ性>」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）からして、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において（『説教の本質と実際』によれば、「聖書への絶対的信頼」に基づいて）、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める第三の形態の神の言葉（教会の<客観的な>信仰告白および教義 Credo）である「**教会の宣教……の事実**は、〔神の側の真実としてのみある、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）において、その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕**神の言葉と同一であるであろう、あるいは**〔神の側の真実としてのみある、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）において、その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕**神の言葉は、教会の宣教の事実と同一であるであろう**」という「実にこの<約束>こそが、

〔前回述べられていた〕あの事実の曖昧性を耐えられないものにし、教会の宣教が誤り、邪道に導くことがあり得るであろうという可能性を恐ろしいものにし、〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返す、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」における〕純粋な教えの〈明瞭さ〉を求めてやまないところのものである——まさに「この約束こそ」が、この「約束に基づいて、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教は、〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕神の永遠の言葉としてのイエス・キリストと、また〔第二の形態の神の言葉である聖書としての〕イエス・キリストについての預言者的——使徒的証言と同じ系列に立つようになるということ〔それらと「等置したり、同一視したりする」ことができるということ〕、それであるから〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教の事実、神が語り給うたし、語り給うし、語り給うであろうということ〔その言葉自身の出来事の自己運動を持っている、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉〕と……近い関係に立っている〔そのことと「等置したり、同一視したりする」ことができる〕と見て取ることを「われわれに許さないところのものである」。したがって、バルトは、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）からして、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学は、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身に、具体的には第二の形態の神の言葉である聖書に先行することはできないのであるから、また第三の形態の神の言葉である教会（そのすべての成員）は起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身と直接的・無媒介的に関係することはできないのであるから、具体的には先行する第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通したところの、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身と第三の形態の神の言葉である教会（そのすべての成員）との媒介的・反復的な関係性（「間接的な関係性」）のことを、「まことの直接性」、「まことの関係性」と述べている。このような訳で、「今や〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての教会〕教義学は、〔前回述べられていた〕あの曖昧な事実の〈批判〉として必然的となる」。その「批判に際しては、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教の中で〔純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての〕神について〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的境界の下でのその途上性で、絶えず繰り返す、聖書への他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方〕で、〈よりよく〉語られるということが問題である」。

前段の「よりよくという関心事」は、「真剣に要求されているその問題性全体の中で人間的な反省と行為が、全く別な……神的な反省と行為に対置させられることに基

づいており、そこからして〔前段で述べた仕方での〕運動の中に入れられる人間的な改善を目指している」。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学は、敬虔性、深さをもつようにと呼びかけるのではなく」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教そのものに対して超越している……〔「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——啓示されてあること・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体におけるキリストにあつての神としての〕神は〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、前段で述べた、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて〕語られたし、今なお語るし、再び語り給うであろうという出来事に合わせて＜方向づけるように＞と呼びかける」。「そのような方向づけの中で、教義学は、まさにその超越的な出来事が教会の宣教に対し内在的になるように、教会の宣教そのものが、……常に新しく……信仰の服従の中で新たにつかまれるべき約束によれば、〔前段で述べたような仕方での〕現にあるところのもの、神の言葉であるようにと呼びかける」。それから、「そのように方向づけるようにと呼びかけることによって」、教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学は、教会の宣教に対し、また敬虔性、生命にあふれていること、真面目さ、深さを持つようにと呼びかける」。このような訳で、「それらのこと」は、「それ自身、それとして追及され、目指されることはできないのであり」、「〔「神的主体」としての〕新しい主体が舞台に登場し」、それ故に徹頭徹尾その「神的主体の賓辞として」の全く人間的な「教会の宣教の人間的な主体」が、その「神的主体に奉仕する」ようになり、「教会の宣教の人間的な主体のところでは服従を見出すことによって、初めて出来事となって起こることができる」。また、「教義学は、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における〕人間的な語りと語りの可能性のすべての内容の彼岸〔・外〕において、語られなければならないことは〔それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」、すなわち「神の言葉の三形態」、換言すれば「キリスト教に固有な」類と歴史性の関係と構造（秩序性）において、〕徹頭徹尾既に語られたし、また語られるであろうということを思い出させることから成り立っている。したがって、教会教義学においては、「何が説教されるべきであるかという問いに関しても」、「あたかもこのことあるいはあのことを是認し、選び、それからそれに基づいて語ることが教会の力の中にあるかのよう」、「教会がおそらく答えを自分でも与えようとするなどということとは排除されている……」。何故ならば、それ自身が

聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）からして、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教の内容に関しては」、「教会が、既に与えられている答えを承認し、受け取り、自分をそれに合わせて方向づけるということが問題である」からである、ここでもその「＜方向づけ＞が問題である」からである。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学は、教会に対して、そのような方向づけの必然性を提示することによって」、「説教の特定の内容を明確に指示する訓練の機会を与えながら、すなわち人間的語りのある特定の内容に関して訓練の機会を与えながら」、「すべての人間的な語りと言語の可能性の彼岸〔外〕で与えられている答えを承認し受け入れるということは、何から成り立っているのかを明らかにするのである……」。例えば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞を、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）を明確に提示することによって、明らかにするようにである。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学は、「教義学的な合理主義を明確に否定する」、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞を、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を明確に提示する、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示の類比・信仰の類比・関係の類比としての「恵ミノ類比」、啓示神学に依拠する、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉である「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としての〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストと共に、教会の宣教〔およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と言りと行動における〕原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕である」として、「聖書が教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならない」ということを認識させ自覚させる。バルト、『ローマ書』で、次のように述べている——「パウロはその時代の子としてその時代の人々に語った。けれどもこの事実よりはるかに重要な事柄は、いま一つの事実、すなわち彼は神の国の預言者ならびに使徒としてあらゆる時代のあらゆる人々に語っている、ということである。（中略）聖書の精神は永遠の精神なのである。〔聖書の中における〕かつての重大問題は今日もなお重大問題であり、今日の重大問題で単なる偶然や気まぐれでない事柄は、また〔聖書の中における〕かつての重大問題と直結している」、それ故にまさに＜言葉の専門家＞であるところの、吉本隆明は「言葉としての聖書というのは、信仰の書として読んでも、文学書として読んでも、あるいは思想の書として読んでも、どんな読み方をしようと人間をのめり込ませる力がある」と語り、太宰治は「他の本が、みな無味乾燥でひとつも頭に

はいって来ない時でも、聖書の言葉だけは、胸にひびく。本当に、たいしたものだ」と語るのである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教の〈内容〉は、実際的には人間的な主体の賓辞ではなく」、「**人間的な主体**」が、具体的には、聖書を自らの思惟と語り行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした「その語りの〈内容〉をもって〈奉仕〉しなければならない**神的主体の賓辞である**」、ちょうど「**神的自由の行為としての啓示**〔イエス・キリストにおける啓示の時間、「われわれのための神の時間」〕は、〔人間の類の時間としての〕**歴史の賓辞ではなく**」、「**歴史が啓示の賓辞である**」ように。「三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の「失われぬ差異性」における第二の存在の仕方、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「ただイエス・キリストの名だけ」、「**ただ啓示の体系だけがある**」のであるから、そのことを認識し自覚したところの、「**教義学的作業、教義学的命題、教義学的教えと体系は、教会の宣教のそのような方向づけの必然性を思い出させることから成り立っている**」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の一つの補助的機能としての教会「教義学そのものが、〔あの「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」における〕教える教会、しかも〔絶えず繰り返す、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」における〕人間的な語りの中で教えている教会に属している」。その「**教義学は、教会に対して（しかも第一に自分自身に対して）……〔先行する第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して、後続して〕すべてのワタシハ語ルと教会ハ語ルの前に、……〔先行して〕主ハコレラノコトヲ語り給ウタが存在するということ、それであるから〔それに後続する〕教会の宣教においては、〔先行して〕主ガコレラノコトヲ語り給ウタが、〔それに後続する〕ただ単にすべてのワタシハ語ルと教会ハ語ルの前でだけでなく〔すべてのワタシハ語ルと教会ハ語ルに先行してだけでなく〕、すべてのワタシハ語ルと教会ハ語ルの〈中で〉貫徹され、勝利を収めるということが問題であるということ**を思い出させる」。言い換えれば、教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に対して、自分自身に対して、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的

な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、その聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くことが問題であるということを想起させるのである、そのことが問題であることに直面させるのである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会が語る言葉が、外からして、教会に原則的に優越した**〔その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕**神の言葉**からして〔具体的には、「教会に宣教を義務づけている」ところの、「先ず第一義的に優位に立つ原理としてのイエス・キリストと共に、教会の宣教における原理である聖書の中での神の言葉」からして〕、そのように照らされ、くまなく照らし出されることが可能であるということ」が、「われわれが＜純粋な教えの客観的な可能性＞」と呼ぶことができるところのことである、「**その中で教会の宣教はまことの神のまことの言葉であるという＜約束の实在が反映されている客観的な可能性＞と呼びことができるところのことである**」。まさに＜純粋な教えの客観的な可能性＞、＜教会の宣教はまことの神のまことの言葉であるという約束の实在が反映されている客観的な可能性＞は、神的愛に基づく父（啓示者・言葉の語り手）と子（啓示・語り手の言葉）の交わりとしての聖霊自身の業である「啓示されてあること」・客観的な「存在的な＜ラチオ性＞」としての「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）における神の言葉の現存である。

それぞれの時代において、その時代と現実強いられたところで、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに「聞き教えられることを通して教える教会」は、まさに前段における「約束でもって自分を慰めることができる」。「**イエス・キリストにあっての永遠のロゴス〔永遠の言葉〕の受肉、世の創造をご自分を通して啓示し、その啓示を通して世をご自分と関係づける永遠のロゴスの受肉**〔「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方における言葉の受肉、それ故にそれは「神性の放棄」や「神性の減少」を意味しない〕**なしには**」、「それとしての永遠のロゴスの現臨」を与えられているとしても、全世界としての教会自身と世は、「全く一人ぼっちで自分自身に放置されていることになる」、それ故にそれによっ

て「自分を慰める」ことはできない、ちょうどすべての自然的な信仰・神学・教会の宣教によっては全く慰められることができないように。このことについて、バルトは、『福音と律法』において、次のように述べている——「〔生来的な自然的な〕人間の人間的存在がわれわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、〔生来的な自然的な〕人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである」。

さて、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉は、イエス・キリストであり、イエス・キリストは、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している〕聖書の中ですべての時代に対して証されているが故に、そのことの中で、神ご自身が、〔聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教の中で語り給うであろうとして約束は認識され得るものであり、また意味深いものなのである」、「それ故に、そのことの中で、〔絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して〕教える教会が教えることは、出来事となって起こることができるのである」、その「神の言葉が、先ず

〔「神的主体としての」〕啓示という＜第一の＞形態をもっており、また〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての〕聖書という＜第二の＞形態を持っているが故に、それに基づいて、神の言葉は、〔全く人間的な「人間的主体」としての〕教会の宣教という＜第三の＞形態を持っているということが言われることができるし、言われなければならない」。したがって、「そのことに基づい

て、……今や教会の宣教に対して、すべての教会の現在において、……その宣教は、事実……人間の言葉として本当に神の言葉への奉仕であるのか、どの程度までそうであるのかという批判的な問いが向けられているのである」。したがってまた、「そのことに基づいて、〔あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」の「方向づけへと招く」〕呼びかけ」、「要求された方向づけ」は、「ただ一つ特定の方向、神の言葉のあれら二つの最初の形態〔起源的な第一の形態の神の言葉、具体的には第二の形態の神の言葉である聖書の中における神の言葉〕を通してしるしづけられた方向をとって進むことができるだけである」方向づけである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会の〔人間的な言葉での〕宣教が神の言葉でもある**」ということは、〔キリストにあっての〕**神は、教会の宣教の中で、ちょうど**〔「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする一神・一人の同一なる神・三位一体の〕**神が**、〔その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の實在」としての起源的な第一の形態の神の言葉である〕**イエス・キリストの中で、またちょうど神が**、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である聖書、すなわち〕**イエス・キリストの証人としての預言者と使徒の中で、ご自身語られたし、語られるし、語るであろうのと同じように、語り給う**ということの意味している」。したがって、「**教会の宣教に相對しての〔教会の宣教における一つの補助的機能としての〕教義学の形式的な課題**」は、「**教会の宣教に対して、その超越性全体の中で、その固有な法則を提示し**」、「〔第二の形態の神の言葉である〕**預言者的——使徒的証言の中での……〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕ただイエス・キリストだけが〔第二の形態の神の言葉である聖書的啓示証言における「ただイエス・キリストだけが**〕、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会の宣教の中で語り給うが故に、また語り給うことの中で、〔人間的な言葉での〕教会の宣教は神の言葉であることを想起させることから成り立っている**」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「**教義学は、……教会の中での一致を目指すようにとの……〔それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における〕神の言葉の〔起源的な〕第一の形態〔イエス・キリスト〕および第二の形態〔預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、聖書的啓示証言におけるイエス・キリスト〕の存在を通して規定された呼びかけである**」——「この呼びかけが、どのような特性を持った呼びかけであるかをその形式的な側面からして述べるとするならば」、それは、「**先ず第一に、〔あの「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」における〕教える教会に向けられた〔あの「神への愛」における〕＜聞く＞〔聞き教えられる〕ようにとの呼びかけ、しかも〔第二の形態の神の言葉である〕聖書の中に証されている〔起源的な第一の**

形態の神の言葉である] イエス・キリストに聞くようにとの呼びかけであるということである」。この認識と自覚が肝要である。何故ならば、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会が教えるということは、あくまで人間的な行為であり、そのようなものとして、そのほかのどの人間的行為の場合と同じように、そのままでは、服従から不服従へ、神の言葉を行うことから人間的な考えと意志を行うことへと逸脱して行くことから保護され守られていない」からである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教會的な教えは、その現実存在を、常に特定の＜教えの形態＞の中に」、「換言すれば……正しく事柄が起こっている時には、〔「純粋な教えの出来事」として、第二の形態の神の言葉である] 聖書の説明および適用以外のものであろうとしないところの、それと共に〔「神の言葉の純粋な宣教」として、起源的な第一の形態の神の言葉である] 神の啓示の宣教以外のものであろうとしないところの思想と概念の系列の中に持っている、しかしその起源と持続を具体的・常にまた〔それぞれの時代において、その時代と現実とに強いられるところの] 個々の説教者の具体的な個人的な人格と彼らの教会の現状という……特定の教會的な時代の流れに負っている思想と概念の系列の中に持っている」。しかし、その「＜理想的な場合＞におけるそのような教えの形態も、それが、発生と最初の登場の段階を過ぎる時には、すなわち第一の口から第二の口に移る時には、……問題的になってくる」ということは「確かである」、それ故にましてやそれが、絶えず繰り返し、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環のベクトルを持たない時には、決定的に「問題的になってくる」ということは「確かである」。何故ならば、その時には、例えば、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聞き教えられることを通して教えるという仕方で明確にされたところの、「律法の成就」・「律法の完成」そのものとしての「福音の中核であるイエス・キリストが、律法を満たし・すべての誠めを遵守し給うたという事実」に感謝をもって信頼し固執することをしないで、それ故に「イエス・キリストを律法の目標とする〔純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法を目標とする〕」ことをしないで、「律法の目標」を、「人間的な自然法や抽象的理性や民族法という形に転倒させてしまう」ということが起こるからである、「神の要求〔・要請・命令、律法〕を、人間的な自分自身の要求に、自分で満足させ得る要求に変えて、神的な『汝は斯くなすであろう』を変じて、人間的な余りに人間的な『汝は斯くなすべし』をつくり上げる」ということが起こるからである、「ある者はその時代の人間中の様々な敗残者に対して、熱心に博愛的配慮……教育的配慮を行う」し、「ある者は大規模な世界改良の偉大な計画に邁進する」し、「ある者は大衆や時代の傾向と手をたずさえて、ある種の正義に邁進する」ということが起こるからである、結局は人間中心主義

的な「神人協力」における人間自身の恣意的独断的な「自己表現としての宣教が企てられる」ということが起こるからである。その時には、「一言で言えば、……始めの曖昧さのない純粋な教えが、今や再び教会の宣教の＜曖昧な＞事実となってしまったのである」。このような訳で、「たとえどれほど信頼に値する人格も、たとえどれほど忠実な信仰の交わりも、それらのものをそのことから守ることができない」。「教会が世にあるということ、そのことを教会」は、「霊において始った宣教が、直ちに全線にわたって、肉にあって終わって行くという傾向を示すということの中で思い知らされるのである」。全く人間的な「教会史の現実の事実」は、決してわれわれが仮定した理想的なケースに対応してはいないのである」。その「現実の事実」は、「神の言葉は、そのような教えの形態が発生した際、既に部分的に聞かれ、しかし部分的には聞かれず、全く別な声によってかき消されてしまい、そもそも一義的に純粋な教えにはならず、常にたゞいろいろと違った種類の曖昧性、より大きな曖昧性とより小さな曖昧性、よりひどく目につく曖昧性とそれほど目立たない曖昧性、より危険な曖昧性とそれほど危険でない曖昧性の間の変化に富んだ戦いがなされるだけであるといった具合である……」。したがって、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、そうした曖昧さを克服して行くことが肝要なことであるということを認識し自覚しない「教える教会の歴史的事実」は、あらゆる時代にわたって、……ただそれらの発生に際して動と反動の動きの中で、ここではより多く聞かれ、あそこではより僅かしか聞かれず、ここではあれらの異質の要素が多く働き、あそこではより少なく働いたという違いによってだけ、互いに区別されたさまざまな教えの形態の間での絶えざる雑踏であった」。

そのような訳で、「確かに人は、人間ノ混乱を超えて働く神の摂理を忘れてはならないとしても、われわれは、そのことを超えて、……もしも〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会」が、「この脈絡の中で〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の〕神について語る時、〔その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方において、〕われわれに対しご自身を結びつけ、義務づけつつ啓示し給うた父〔起源的な第一の存在の仕方——啓示者・言葉の語り手・創造者〕、子〔第二の存在の仕方——啓示・語り手の言葉・和解者〕、聖霊〔第三の存在の仕方——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者〕について考える代わりに」、「突然何か……自分自身最後的には混沌でしかない故に混沌を欲することしかできない曖昧な歴史の神を考えたいというのではなく」、「〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」において現存している〕聖書と共に教会に与えられている約束を否定し、それと共に自分の現実存在を放棄し、……また神の摂理を信じる信仰を失ってしまいたくないならば」、「教会は決してそこに安閑と居座ってしまってはならない教会の宣教の事実の曖昧性に直面して立っているということを看過してはならないの

である〔そのことを認識し自覚していなければならないのである〕」。イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身」が「啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞を持っており、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているのであるから、教会の宣教およびその一つの補助的機能としての教会教義学は、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神と、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くという「正しい事柄」の認識と自覚が肝要である。なお、「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」については、「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その1）＜イエス・キリストにおける神の自己啓示＞および＜その自己証明能力の総体的構造＞ならびに＜まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会＞」を参照されたし。